



BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.41

'03 夏号



創業三百有金五

梅栄堂

〒590-0943 堺市東之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL <http://www.baieido.co.jp>

香ばしいコーヒーの香りが、
お線香になりました。

残香飛

せんこうの

えもいえず人を引きつけるコーヒーの香り…
コーヒーには古来から素晴らしい薬効があると言われてきました。
実際、コーヒーには情緒をつかさどる右脳の働きを活発にしたり、
また心身ともにリラックスさせる働きがあることが認められています。
是非新しい香り「残香飛」で、豊かなアロマの世界をお楽しみ下さい。



●標準小売価格 1,000円
(消費税別)



下町情緒あふれる

季節の風物詩

東京の下町、へ観音さまで有名な浅草寺では、毎年夏も近づくと七月九日と十日の二日間、「ほうずき市」が開かれます。この日は観音さまの四万六千日の「功德日」にあたり、この日にお参りすれば一生分のご利益があると言われてます。そのため江戸庶民はこの日にこぞって詣で

ため、市が開かれるようになりました。こうして江戸時代から今日に至るまで、ほうずき市は、夏の下町情緒を語るのに欠かせない年中行事となっています。ほうずき市が開かれる浅草寺ですが、推古天皇三十六年（六〇八年）、隅田川で発

見された黄金の観音像を安置するために、御堂を建てたのが浅草寺の起源といわれています。とくに江戸時代になってからは、徳川家の庇護の下、浅草寺を中心として、浅草近辺は門前町として大きく発展しました。そして時代が変わった今も、『雷門』や『仲見世』などに代表されるように、人情あふれる下町として人々に親しまれています。

さて、七月九日、十日の両日、浅草寺の境内は約四百五十店の「ほうずき屋」と約三百店の売店が出て大勢の人でごった返します。はっぴ姿に、ねじりハチマキでの売り子さんの「いらっしやい！」の声がいよいよ雰囲気盛り上げます。

浅草寺のほうずき市で売りに出されるほうずきは、かつては東京の江戸川区で栽培

培されたものがほとんどでしたが、最近では、千葉や静岡県のものが多くなっています。

風鈴も付いている豪華な鉢植えのものから袋入りやプラスチックのものまで、ほうずきの種類は様々。夕方から夜にかけては、ゆかた姿もちらほら目に付いて、賑やかな中にも風情ゆたかに下町の夜は更けていきます。

緑台、打ち水、風鈴の音……。たまにはクラーのスイッチを切って、季節の到来を楽しんでみてはいかがでしょう？



●浅草寺ほうずき市 七月九日 十日
●アクセス
営団地下鉄銀座線「浅草駅」
都営地下鉄浅草線「浅草駅」
東武伊勢崎線「浅草駅」

お店を訪ねて

そごう柏店

お客様には明るく、やさしく。



今春、そごう柏店がリニューアルオープンいたしましたのを機に、こちらの仏具売り場も場所を移転し、新しく生まれ変わりました。お客様にはたいへん喜んで頂き、わざわざお祝いのお花をお届け頂

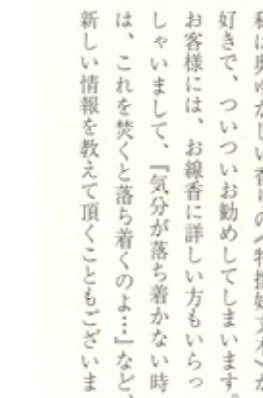
いたり、「広くなって、ゆっくり落ち着いてお買い物ができるわ。」等々、ご好評を頂き、とても嬉しく思っております。また、おかげさまでお客様の数も増え、最近では若い世代の方々もだんだんお越し頂けるようになってまいりました。こちらのお客様は、長年おつきあいさせて頂いて、「いつものあの線香」と御指名でお求め頂くことも多いのですが、「運物にしたいのですが、どれがいいでしょう？」などと相談されるお客様もいらっしやいます。そんな場合は、天然香料で安心できる「梅栄堂」の線香をお勧めすることが多くなります。中でも、私は奥ゆかしい香りの（特撰好文木）が好きで、ついついお勧めしてしまいます。お客様には、お線香に詳しい方もいらっしやいます。「気分が落ち着かない時は、これを焚くと落ち着くのよ……」など、新しい情報を教えて頂くこともございま

す。資料を頂いて調べたり、自分でも試してみたりしますが、お客様からの（生情報）は、たいへん役に立ち、勉強になります。仏具売り場という場所柄から、人生の大きな節目でおみえになるお客様もございまして、できる限りお客様の気持ちをお大切に、ゆっくりとお話しをお伺いすることを心がけております。数ある中から、わざわざこの売り場に足を運んで頂くのは本当にありがたいことです。そんなお客様のためにも、いつも（明るく、やさしく）お出迎えできたらし……と思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

（売場担当 藤原さん談）

雑感スケッチ

■柏市は、あけぼの山農業公園や、県立柏の葉公園などをはじめ、豊かな自然に囲まれた街ですが、一方で、J.R常磐線上野より快速列車で二十八分という交通の便も手伝って、千葉県北部の中核都市として発展を続けています。今回は、ショッピングゾーンとして賑わいをみせるJ.R柏駅東口に新しくリニューアルした（そごう柏店）の仏具売り場を訪ね、お話しをお伺いしました。



中国の香①

大阪大学総合学術博物館
米田 該典

春満開の中国を訪ねて

何時になく雨の多い三月も終わりの三十一日大阪を出た。行き先は中国北京、西安への調査旅行である。目的は中国の博物館事情の視察で、中国の重要な各種の文化財が集まる西安、北京での保存事情を視察することにした。西安には楊貴妃に絡んで華清池がある。そこにはいつの間にか妖艶な半裸の像が池の中に立ち、傍らというか入り口すぐの所には沈香亭の看板を掲げた土産物店が麗々しく登場している。確かに中国の香の話になると楊貴妃は欠かせないが、だからといってここまでしなくてもとの思いがあったのは事実である。古代にも香妃の話があり、中国の文献上には多くの香のことが記されている。そんな逸話を大事にする中国ではあるが、都市は間違いなく変貌を続けている。特に北京の場合は激しく、二、三年も訪れていないと浦島太郎になりかれない。広大な地域から発掘された遺物の



▲華清池の楊貴妃像

は膨大で各地の博物館に保存されている。歴史的にも古くから財物を保管し、保存研究を行ってきた博物館を訪問すること

うも、西安地方には二種かそれ以上のキリがあり、まずは白い花の種類が咲いてから運れて紫の花が咲くようである。今年には昨年よりも寒く、開花が遅いのである。黄色い茶の花に囲まれ、スモモやモモは満開の勢いである。

北京、たいたい大改造中

定陵の博物館を訪問の途次久しぶりに万里の長城も訪れた。高速道路は整備され、町の混雑を抜け出てからは一気に到達する。途中の居備間は見事に変貌し、壊れて既になかった長城が復活している。それが残存遺跡なのかは説明を聞かないと分からない。長城への途次、各所で多数のモモが一斉に花を開いている。長城周辺の殺伐たる自然環境の中ではまさに桃源郷なのだろうと勝手に推測してしまう。レンギョウのつぼみは堅く、ボタンは芽出しにも至っていない。北京はたいたい大改造の途中である。郊外というか、町



▲玄奘ゆかりの大雁塔前に咲く花々

の周辺部分の各所では高層ビルの建築ラッシュである。今回泊まったホテルは外資系の五ツ星、部屋から外を見渡せば、以前は近代的と標榜したであろう三、五階程度のビルは次々に壊され、空き地も多い。住民の思いは二〇〇八年のオリンピックに向けてということで、異論は少なそうだ。東京オリンピックや七十年の大阪万国博を経験した小生には、そのときのエネルギーを感じてしまい、奇妙な共感を覚えてしまう。

発掘された香木と出会う

そんな思いを抱きながら定陵の遺跡を訪れた。陵内から発見された多くの遺品が墓道の両側に建っている陳列館に並んでいる。最後

に訪れた展示ケースの中に塊が三つ並んでいる。もっとも大きなモノは二・五kgを超えるようである。表面は黒く変色というか埃をかぶっただけか判断しきれないが、形状は明らかに見慣れた沈香である。定陵を初めて訪れたのは文化大革命の最中の一九七二年のことであった。その後幾度か訪れ、関係者から話を聞く機会があったが沈香が発掘されていたとは聞いていなかった。確かに展示品に附された説明は白木香である。白木香の名は中国での沈香のことであることは承知していた。中国には歴史上の香木があっても不思議ではないと思いつつ、具体的な品物に出会ったことは少なかった。それだけに感慨は一入であった。関係者の話では同類の香材は少なからずあるようである。ただ、沈香にしろ白木香にしろ、定陵にそれが存在することの意義にまで関係各位すべてが承知しているとは思えない。突然の登場とあっては、

現場では埒があかず眺めるだけになった。すぐにでも改めて飛んで行きたいのだが、何しろSARSの影響で中国の渡航はしばらくは思うようにならないようだ。考えて見れば私が滞在中にSARSのことは大きな問題になりつつあった。言うならば、SARSとニアミスだったのかも知れない。今そんな思いを抱きつつ、中国の香の事を手許の資料で眺めている。貴重な誌面を頂き暫時「中国の香」と題して中国の香の資料をあたって見よう。古来、日本人の香の知識は中国の本草書や香書から得た知識が主体であった。沈香も中国海南島や廣西省に産するとは言え、多くの良質の香材は中国からさらに南の国々に産するものが多い。とすれば、中国の知識も移入の知識である。共通することも多いと思う。

よび かい
米田 該典所属:大阪大学総合学術博物館 薬学博士
神戸市生

専攻:文化財の材質調査と保存の科学

薬用資源学 薬史学

薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に手を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。



▲中国唐時代の携帯用香炉

月下美人



真夏の夜に咲く情熱の花

芳香を放ちながら一晩だけの命を燃焼させます。

月下美人は中南米原産のサポテン科、クジャクサポテンの一種です。高さは一〜三メートルほどになります。葉状の茎は薄く、直径二十センチほどの大輪の花を咲かせます。月下美人といえ、めったに咲かない珍しい花のように考えられがちですが、挿し木をして二〜三年間、冬の寒さと夏の日焼けに注意して育てれば、白く美しい大輪の花を咲かせることは、思ったほど難しいものではないのだそうです。ただ、他の花とちがいで、夏の夜のほんの数時間しか咲いていないことから、自然なたちで人の目にふれることが稀なため、育てにくい花のように考えられているようです。月下美人はその花の咲き方にも特徴があります。初めは下向きに育ってきた蕾が、花が咲く数日前からだんだん上を向きはじめます。

そしていよいよ夕方ともなれば蕾は徐々にふくらみはじめ、最後はスピーディーに、一気に開花します。咲く時の勢いで茎が揺れると言われるほどの力強さで開花した月下美人も、その美しい姿が見られるのは二、三時間。翌朝にはすっかりしおれてしまいます。さて、月下美人の香りは、むしろ満開になる少し前に最高潮に達します。その香りは色々なものに例えられています。ジャスミンの花に似た甘い香り、パウダリーなバラのような香り、それにスパイシーなカーネーションの香り、苦味のあるウツデインな香りなど。それらが渾然一体となって、独特の妖艶な香りをもも出し、あたり一面に放ちます。香氣成分を分析してみても、様々な香りの成分を合わせ持っていることが、証明されています。中国では月下美人のことを曇花（タンファン）というそうです。「曇花一現」という諺もあって、その意味は、「美人薄命」だとか。妖艶で豪華な花を咲かせ短い命を終える月下美人は、まさしく真夏の夜に咲く情熱の花といえるでしょう。

●話題

特集「堺を知っているか？」

大人の自転車生活誌「BICYCLE LE NAVI」新春号では、「堺」の街を大特集、色々なアングルから堺を紹介しました。「もの」の始まり何でも堺のページでは、堺の名所旧跡を一巡りし、「うまいもん」や「堺の巧」をレポート。へまかちドミュージアムとしての梅栄堂ショールームにも立ち寄り、歴史の街「堺」が生んだ線香の香りを聞いて、しばしのリラックスタイムを過ごしてみてもいいかもしれません。

●古香堂TVで登場

関西テレビのスポット番組「満たして！好奇心」(二月十五日)では、和風雑貨の店「古香堂」が紹介されました。ストレス解消の一つとして「お香」を探して古香堂を訪ねたレポーターは梅栄堂に驚きました。おかげさまで、「残香飛」はたいへんご好評を頂いております。

堂本社にも立ち寄り、現在静かなブームになっている「香道」を体験されました。

●チンチン電車でぶらり

大阪市内と堺の街を結ぶ阪堺電車は、地元ではチンチン電車として親しまれています。サンケイリビング堺では、さかいで遊ぼう」と題して、チンチン電車で巡る日帰りの旅を提案し、史跡、伝統産業、こだわりグルメなどが掲載されました。記事では沿線にある与謝野晶子の生家跡をはじめ、「梅栄堂」も紹介されています。

●新製品・マーケティンク

日経産業新聞(四月八日)の「地方のキラリ」のコーナーでは、新発売された梅栄堂のコーヒークラッシュの香りがある線香「残香飛」を紹介。家庭やオフィスでも使える新しいタイプのお線香として推薦されています。

●新商品紹介

「さわやか」檜の香り

この度、百パーセント天然楠精油を使用したお線香「さわやか」檜の香りをご新発売いたしました。檜にはアルファピネンやボルネオールという成分が含まれていますが、この香り成分にはアルファ波を出現させて気分をリラックスさせる効果があるといわれています。百パーセント天然楠精油使用の「さわやか」檜の香りです。森林のすがすがしい香りを是非お試しください。総檜を使いました。箱詰めにしてお届けいたします。

●さわやか 檜の香り
5,000円(消費税別)



●超高級品シリーズ

お徳用箱

新発売

昨年発売いたしました「伽羅孔子木」は、おかげさまで好評のうち完売させて頂きました。今回、もう少しお手軽にお求め頂ける、超高級品シリーズ「沈香苑」「沈香薫昇」「沈香鳳凰」のお徳用箱を新発売いたしました。従来の中寸桐箱一東入りに比べ、お徳用になっております。是非ご利用ください。



●沈香 風輪 20,000円
●沈香 薫昇 30,000円
●沈香 鳳苑 50,000円(ともに消費税別)